

遠い海の記憶

妖精のまじまじと

海と人の失われた絆を少女は見つけた。ジョン・セイルズ監督が美しい映像に語り綴ぐ、アイルランドの妖精伝説。

フィオナの海

ジュニー・コートニー ● アイリーン・コルガン ● ミック・ラリー ● リチャード・ジェリダン ● ジョン・リンチ ● シリアン・バーン ● スーザン・リンチ
監製 脚本 編集 ジョン・セイルズ ● プロダクション デザイナー エイヴァ・アン・スミス ● 音楽 コンラート・ヤイ ● 編集 マイク・リンチ ● カメラマン マーティン・グリア ● 衣装デザイナー ジョー・バートン ● 美術 トレバー・ロビンソン ● 編集者 ジョー・バートン ● 音響効果 トレバー・ロビンソン ● 字幕 トレバー・ロビンソン ● 翻訳 トレバー・ロビンソン ● 上映権 トレバー・ロビンソン ● 配給権 トレバー・ロビンソン ● 制作 トレバー・ロビンソン ● 1994年京都国際映画祭正式出品作品 ● 1995年東京国際映画祭カネボウ国際女性映画賞参加作品
JONES ENTERTAINMENT GROUP LTD. in association with PETER NEWMAN PRODUCTIONS presents A SKERRY BONES PRODUCTION



世界の名画を見る会 Vol. 4



- 講演：高野悦子 (岩波ホール総支配人)
〈演題〉アメリカ映画の魅力
- 上映作品：「フィオナの海」(アメリカ映画)

'97 4月6日

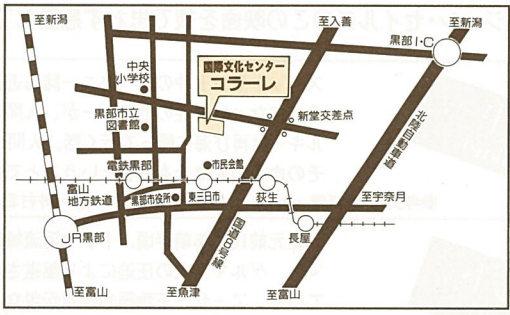
開場 13:00 開演 14:00

黒部市国際文化センター コラレ (大ホール) 入場料 / 1,200円(全席自由) 当日 1,500円

プレイガイド / コラレ・黒部メルシー・ロイヤルバリー・黒部・魚津サンプラザ・入善コスモ21・朝日アスカインフォーマット(市民プラザ, CC)

お問い合わせ / 財団法人黒部市国際文化センター
TEL (0765) 57-1201 FAX (0765) 57-1207

5歳未満のお子さまの入場はご遠慮願います。
一時保育を希望される方は事前にご連絡ください。





解説

荒涼としながらも美しく、人々に郷愁を抱かせるアイルランドの風景。海や風、草や木、それらすべてに生命が宿り、遠いケルトの記憶が刻まれている——「フィオナの海」は、そんなアイルランドの風土と歴史に育まれてきたケルトの妖精伝説をモチーフにしている。

舞台となるのはアイルランドの歌姫エンヤの出身地でもある北西部のドネゴール州。母親を失った少女フィオナは、アイルランドの北西海岸に住む祖父母に引き取られ、その地に伝わるアザラシの妖精(セルキー)の伝説を聞かされた。そして、かつて海にさらわれた幼い弟が生きていると確信したフィオナは、今では無人となり、セルキーたちに守られている孤島へ弟を捜しに行く。それはフィオナにとって、自分と家族のルーツを捜すことでもある。そして、観客にとっては、近代合理主義の中で見失った自然と人間のつながりを再発見する旅なのである。

監督のジョン・セイルズは、ジョン・カサヴェテス、ジム・ジャームッシュ等と並びアメリカの独立プロ系映画界を代表する存在であり、「ブラザー・フロム・アナザー・プラネット」(84)、「メイトワン1920」(87)、「希望の街」(91)など、一貫して異なる人種、階級が生む社会的軋轢を主要なテーマにしている。「フィオナの海」でもイングランド人に疎外されてきたアイルランド人の挿話など、一見ファン



フィオナの海

タジックと思えるこの作品にも彼の作家としてのアイデンティティが容易に見いだせる。原作はケルトの妖精の民間伝承をモチーフにしたロザリー・K・フライの小説(57)で、ジョン・セイルズは、長年の協力者であるプロデューサーのマギー・レンジから映画化をすすめられたという。セイルズは、この小説が持つ伝承の世界とリアリズムに強く魅せられ製作に踏みきった。完成した作品は、彼独自の視点で民族と歴史、人と自然を見つめ、見る者を古代ケルトの神秘的な世界へ誘う素晴らしいものとなり、アメリカで公開されるや、記録的なロングランの大成功をおさめた。ひとつのことを信じて、強い精神力で行動する少女フィオナを演じるのは、1000人近いオーディションの中から選ばれたジェニー・コートニー。他にパット・オコナーの「ギャル」(84)で印象的な演技をみせたジョン・リンチなどアイルランドの俳優たちが脇を固めている。

撮影は、「メイトワン1920」でもセイルズとコンビを組んだアカデミー撮影賞受賞者ハスケル・

ウェクスラーが担当。随所で印象的に使われるアイルランド音楽は、セイルズの長年の音楽パートナーであるメイソン・ダーリングによる。原題は「ローン・イニッシュの秘密」。

物語

少女フィオナは、アイルランドの北西海岸で暮らす祖父母のもとに一人帰ってきた。

フィオナのコネリー家は、かつてその沖にある小さな島、ローン・イニッシュに先祖代々暮らしていたが、フィオナの母が病死したことを機に島を離れた。

しかもその際に幼い弟ジェミーも波にさらわれるという悲しみが重なり、彼女はしばらく海を離れて生活していたのだった。

ある日、フィオナは従兄弟のイーモンから、死んだはずのジェミーがローン・イニッシュの付近の海で揺り籠にのって漂っていたという噂を聞く。そして、ジェミーのそばには、いつもアザラシがいたと言う。またフィオナは町で、父親の従兄弟にあたる謎めいた男タッドに会った。タッドは、今やタブーとなっているコネリー家に伝わるアザラシの妖精の話をして、自分たちには海の妖精の血が流れているという。フィオナはいつしかジェミーがローン・イニッシュの海でアザラシたちと共に生きていくと信じるようになり、イーモンを説得して祖父母に内緒で島に渡る。数年ぶりで訪れたローン・イニッシュの家々は荒れ果てていた。しかしそこには——。

(上映時間1時間43分)



- ゆくえ知れずの弟ジェニーがアザラシと生きていると信じる少女フィオナの一途さは、一族に流れる妖精セルキーの血のせいかも知れない。人間と妖精がくり展げる物語は、現実でありながら、その枠をこえ、遠い古代のケルト伝説へとつながる。 井村君江(妖精美術館館長)
- 人が未知なる世界への橋を渡ろうとする時、その導き手となるのはいつも無垢なる少女の魂だ。人は今、新しい神話を築く時に来ている。 龍村 仁(映画監督)
- ケルトの神話が今、アイルランドの海に蘇る。人間と自然、この世と異界がクロスする場所へ。 鶴岡真弓(ケルト研究家)
- アイルランド沖の小さな島に語り継がれる不思議な伝説。大自然の美しさと厳しさを伝えるジョン・セイルズのこの映画を観て思わず感動してしまった。 ピーター・バラカン

スコットランド沖のオークニー諸島近辺などに伝わるアザラシに姿をかえた妖精。その伝説とは、皮をぬぎ美しい人間の姿になった女性のセルキーが、人間の男に見初められて幸せな結婚生活を送る。しかし、いつか別れの時がきて、セルキーは再び海に帰って行く話。人間とセルキーは恒久的には結ばれないが、彼らの間に生まれた子供は子孫を増やし、その血筋の者は今も健在ということである。

参考文献 ● 「妖精 who's who」 K・ブリッグス著・井村君江訳(筑摩書房) ● 「妖精事典」 K・ブリッグス編・井村君江ほか訳(富山房)

紀元前1000年前半頃、ドナウ河流域に現われ、ヨーロッパ各地に移住・移動したヨーロッパの先住民族。やがてローマ人、ゲルマン人の圧迫により駆逐され、現在はアイルランド、スコットランド、ブルターニュ等にその末裔が散在している。アーサー王物語や妖精伝説など多くの民間伝承が残っており、一種輪廻に似た独自の自然観を持っている。西欧的な合理主義が行き詰りをみせた現在、全ての自然に生命が宿っているというケルト的な発想が再発見され、音楽、美術のみならず様々な分野で日本でもケルトに対する関心は数年來急速に高まっている。

セルキー
[Selkie]

ケルト
[Celt]

the Secret of
Roan Inish